

日本語学習者の指示形容詞の使用

本橋 美樹

要旨

本稿は、コーパス・データの会話資料から、英語話者である中・上級の日本語学習者による文脈指示用法指示詞の使用実態を明らかにしたものである。指示形容詞のみを取り扱い、結合する名詞の性質との関係も考察した。

まず、迫田（1993，1997）による2つの先行研究を再検証した。韓国語・中国語話者を対象とした迫田（1997）の調査では、ソ系＋抽象名詞、ア系＋具体名詞という組み合わせで使う傾向がある、との結果を報告しているが、韓国語・中国語話者だけでなく英語話者も対象とした本調査ではそのような傾向は見られなかった。学習者は抽象名詞・具体名詞の両方に対しソ系を多用し、また、従来言われているア系・ソ系の混同だけでなく、コ系・ソ系の使い分けも困難であるということが明らかになった。さらに、迫田（1993）は、英語話者つまり二項対立指示体系の母語話者はソ系の使用が少ないといった報告をしたが、本調査では日本語母語話者と同じように、やはりコ系が少なくソ系が多く使われるという結果になった。

また、誤用だけではなく「非用」（水谷 1993）という今までにない角度からも分析した。「非用」とは文法上の誤りでなく、ある文法項目を用いないため日本語としての適切さを欠いた表現をさす。調査の結果、学習者は、日本語母語話者と違い、「指示詞＋名詞」の代わりに「彼、彼女」を使用し、その結果日本語として不適切になってしまう、という例を見た。その原因は母語である英語の干渉が考えられる。

【キーワード】 指示形容詞、文脈指示用法、誤用、非用、英語話者

1. はじめに

日本語の指示詞のうち代表的なものはコ・ソ・アで始まるが、その用法は「現場指示用法」と「文脈指示用法」に分けられる。これまでの先行研究により、中上級の日本語

学習者にとって、現場指示用法に較べて、文脈指示用法の方が困難であることが示されている。従って、第二言語習得の先行研究も文脈指示用法を中心に行われている。

本稿では、これまでの指示詞の第二言語習得研究を踏まえ、英語を母語とする日本語学習者による文脈指示用法の指示詞の誤用の傾向を見る。さらに、誤用だけではなく「非用」(水谷 1993)という今までにない角度からも分析し、その実態を明らかにする。

なお、指示詞にはそれのみでつかえる指示代名詞(これ・それ・あれ)と、名詞に連結する指示形容詞(この・その・あの等)がある。連結する名詞と指示詞の関係についても考察するため、本稿が対象とする指示詞は指示形容詞に限る。

2. 先行研究

指示詞に関する第二言語習得の先行研究により、特にソ系とア系の使い分けの習得が困難であるということが示されている。

迫田(1993)は、自然会話を中心としたインタビュー調査によって、話し言葉における非現場指示用法の指示詞コ・ソ・アの習得を研究している。言語移転の可能性を念頭に置き、母語の指示詞体系を三項対立指示体系の母語話者(韓国人、タイ人、フィリピン人など)30人と二項対立指示体系の母語話者(中国人、インド人、アメリカ人)30人を対象に各々1時間ずつの対話を行い、資料分析を行っている。その結果、指示詞の習得に母語の移転の可能性がみられ、二項対立指示体系の母語(中国語、英語など)の学習者は、三項対立指示体系の母語(韓国語、タガログ語など)の学習者に較べると、コ系・ア系の指示詞の使用が多く、ソ系が少ないと報告している。さらに、ア系の習得は母語の違いにかかわらず難しく、全体的にソ系とア系の選択が学習者にとって困難であると結論づけている。

酒井(1987)は中国・韓国語話者を中心に扱い、Niimura & Hayashi(1994)ではアメリカ人の日本語学習者を扱い、同様にア系とソ系の指示詞の混同が多いことを示している。

また、迫田(1997)では、日本語学習者の指示詞ソとアの使い分けが何に起因するのかを、名詞と結合するソ系指示代名詞(その・そんな・そういう)とア系指示代名詞(あの・あんな・ああいう)に関して調査した。韓国語・中国語話者各3名を3年間の縦断的研究によって学習者のソ系とア系の使い分けの変化を追い、ア系指示詞が使用されて誤用になる場合は、実体のある特定の具体名詞が多く、ソ系指示詞が使用されている場合は漠然とした抽象名詞が使用されている場合が多いという結果を得た。また、ソ系指

示詞を使うべき所でア系指示詞を誤用するが多いとも述べている。

さらに、なぜこのパターン形成が起きるのかということに関し迫田は、日本語はコ系やア系指示詞が直接的経験の指示対象を指すのに対し、ソ系指示詞は間接体験による概念知識の指示対象を指すため、ソ系指示詞で表された指示対象は漠然とした抽象的な性質を持ったものが多くなる、と述べている。一方、ア系は現場指示用法と同様に言語テクストを物理的に捉えるダイクシス用法しかなく、ア系が使用された場合は話し手にとって特定できる具体的なものが多い。そのため、学習者も最初に「あの人」「あんな先生」「その場合」「そんなこと」などのひとまとまりの単体の語、ある種の定式表現としてとらえており、そのうちある種の傾向を伴った多量のインプットによって具体名詞にはア系指示詞が、抽象名詞にはソ系指示詞のパターン形成がなされるようになったのではないかと、迫田は最後に結論付けている。

3. 研究の目的

本研究は、上記の迫田による先行研究の結果を検証することから始める。次の3点を目的として行う。

- (1) a. 迫田(1997)で得られた韓国語・中国語話者の学習者の結果が、英語話者の場合にもあてはまるか検証する。
- b. 迫田(1993)で得られた英語話者に関する結果(二項対立指示体系の母語話者はソ系が少ない)を再検証する。
- c. 指示詞の誤用だけでなく、非用の可能性も検証する。

「非用」は水谷(1993)による造語であるが、文法上誤りではなく、用いないことによって日本語として適切さを欠いてしまった、学習していながら使用にいたらない表現形式を指す。このように指示詞の非用によって適切さを欠いた場合を分析の対象とすることによって、指示詞に関する学習者の使用パターンをさらに包括的にとらえ、明らかにすることを目的とする。

4. 迫田(1997)の結果検証のための調査

4.1 調査の対象と方法

本研究は、北九州市立大学上村隆一氏作成による「インタビュー形式による日本語会話データベース」に納められた会話を利用した⁽¹⁾。英語母語話者はこのコーパス・データより、20代の学生男女各10名ずつの会話を対象とした。迫田(1997)は韓国語・中

国語話者のみを対象とした研究であったのに対し、本研究は英語母語話者を中心に分析する。さらに、迫田の結果を再検証するために、韓国・中国語話者のデータも 10 名分、分析の対象とした。会話はそれぞれ 15～20 分で OPI のインタビュー形式をとっている。

4.2 調査の結果

迫田 (1997) の結果は韓国語話者と中国語話者の場合、ア系指示詞 + 具体名詞、ソ系指示詞 + 抽象名詞というパターンがあるということを示唆するものであった。具体名詞、抽象名詞の例として、迫田は以下を挙げている。

- (2) a. 具体名詞：人・先生・学生・女・男・学校・大学・店・会社
b. 抽象名詞：こと・気持ち・感じ・話・考え・場合・ケース

よって、ア系指示詞 + 具体名詞の場合「あんな人」「あの学校」となり、ソ系指示詞 + 抽象名詞では「そんなこと」「その場合」のような例になる。以上を参考に、英語話者の会話の中にそのようなパターンの組み合わせが見られるか、また、逆にア系指示詞 + 抽象名詞、ソ系指示詞 + 具体名詞も見られるか、その使用数を比較した結果を下に示す。

表 1 学習者におけるソ系とア系の指示形容詞の使用数

学習者 (母語別)	ア + 抽象名詞	ア + 具体名詞	ソ + 抽象名詞	ソ + 具体名詞	合計
英語話者 n=20	4 (2.2%)	3 (1.6%)	93 (51.9%)	79 (44.1%)	179 (100%)
中国・韓国語話者 n=10	3 (3.8%)	3 (3.8%)	37 (48.0%)	30 (38.9%)	77 (100%)

表 1 を見ると、後に続く名詞の種類にかかわらず、全体的にソ系指示詞の使用が多い。ソ系 + 具体名詞も多く見られ、ア系 + 具体名詞が特に多いという結果は得られなかった。また、この傾向は中国語・韓国語話者にも見られ、迫田 (1997) とは違う結果となった。

ソ系 + 抽象が特に多いのは、「そのため」「その時」「その後」「それから」のような、学習者がフレーズとして初期の段階で学習し、かつ使用頻度の高い接続詞が多いためと思われる。また、「その人」「その子」「その街」など、ソ系 + 具体名詞でも、ア系が間違っ選ばれる場合は迫田で見られた結果ほど、多くはなかった。以下に、指示形容詞別の誤りを示す。

さらに、今回の調査で新たに見られた結果として、ア系・ソ系両方可可能な場合でも、ソ系を選択するケースが多く見られた。以下に具体例を示す。(BP などのイニシャルは学習者、NS は日本語母語話者のインタビュアーを示す。)

- (3) NS : (オウム真理教が) できたっていうのは、どういことでしょうね。なんか歴史的な観察、ありますか。

BP : ええ、(...) まあ歴史にも、そんなグループが、ないんですけど、でも似てるグループがあると思いますよ。(ok あんな)

- (4) (映画の話をして)

NS : 『クライアント』っていうんですか。(DW : そう) あの映画を見てとっても、(略) 面白いなあ、なんて思ったんですけども、本お読みになりましたか。

DW : はい、そうでした。(...) そのしゃく者[作者]が初めに書いた本は、英語で“The Time to Kill”ですけど、その本は、ほんとに弁護士によって、書いた本です。(ok あの)

ア系も可能な上のようなコンテキストは 8 例あったが、学習者がア系を使う傾向は見られなかった。これはソ系よりア系の使用が学習者にとって困難である、ということを示唆している。

また、上に述べたように迫田を始めとした先行研究では、ア系とソ系の難しさが研究の中心となってきたが、ソ系・コ系間の間違いも多く見られた。まず、初出の名詞にコ系を使用したり、ソ系とコ系を混同する例も見られた。(7)の二番目の「この」や、(8)は、ソ系で受けるべきであろう。

- (5) (青少年の犯罪について)

NS : (麻薬は) どこから持ってくるんですか。

SD : (...) 麻薬のシステムがあって、あの、サプライヤーから (...) 下の人々にこの麻薬をあげて、(...) この青少年が、あちこちに行って売ります。

- (6) (オウム真理教について)

NS : (友だちに) そういう宗教に入っているような人もいますか。

IM : (...) 全然、私の友だちの中では、あの、誰かこの宗教に入っている人は、いなかったから、そして何か情報はもっていないんですけども。

また、例示するような状況で、「趣味は、スポーツとか、音楽とか、そのようなことで

す。」と最後に「そのような」を用いて自分の話をまとめる学習者が多かったが、下の例のように、「*この（その）ようなこと」を使用する例が多数あった。

(7) NS : (...) 休みの日は何を？

TJ : 宿題とか、勉強とか、このようなことですが (...)

(8) (小説には登場人物が大切、という答えに対して)

NS : 登場人物のなんですか、例えば。

KT : んー、あの一。親切な人ですかー、悪い人ですか。このようなことが大切。

このようなソ系であるべきものをコ系で指してしまう例が 16 例あった。

これらの例から、ア系・ソ系だけでなく、ソ系・コ系指示詞の選択の誤用に関しても、ある一定の傾向があることがわかる。この点は、後節で詳述する。

5. 迫田 (1993) の結果検証のための調査

母語の影響、という観点から研究がなされた迫田 (1993) においては、二項対立指示体系 (英語・中国語) が母語の学習者 (以下二項学習者) と、三項対立指示体系 (韓国語・タガログ語) が母語の学習者 (以下三項学習者) の各指示詞の使用率を較べた。その結果、二項学習者のコ系・ア系指示詞の使用率は三項学習者の使用率よりも多く、逆にソ系の使用率は比較的少ないという結果を報告している。

しかし、前節でも見たように本調査では、英語話者でも、中国・韓国語話者とほぼ同比率でソ系指示詞の使用率が多いという結果が見られた。さらに、日本語母語話者が会話の中で最も多く使用するのはソ系であるという事実も (迫田 1999) 本調査の学習者の結果と矛盾しない。

迫田の調査のデータであるが、実際の数値は、ソ・コ・ア全部のうちア系使用率は日本語母語話者で 24%、二項学習者で 21% と大差ない⁽²⁾。三項学習者と較べてその使用率は多かったという報告だったが、実際の所、ア系が必要以上に多かったわけではない。しかし、迫田のデータによると、コ系は日本語母語話者 6%、二項学習者 31% となっている。この使用率の高さは、前節で述べた、ソ系・コ系間の誤用によるものと思われる。

以上より、本調査の結果は、迫田が述べた英語母語話者の特徴とは異なるものとなっ

た。しかしながら、母語の影響が全くないと言えるだろうか。次節より、この点を考察していく。

6. 指示詞の非用

冒頭でも述べたが、「非用」は水谷（1993）による造語である。「非用」は、文法的な間違いである「誤用」に対し、文法的には良いが日本語としての適切さを欠いた表現形式を指す。

まず、目立った傾向は、母語話者が一度会話の中で紹介した第三者を「この人」「あの人」と指すのに対し、学習者は「彼」「彼女」を使用する、というのが挙げられる。以下に、母語話者の「指示詞＋人」「彼・彼女」の使用率と、学習者の使用率を比較した表を示す。母語話者の会話は、英語話者の場合と同じコーパス・データから男女10人ずつを選んだ。

表2 日本語母語話者（NS）英語母語話者（NNS）の「指示詞＋名詞」「彼/彼女」の使用数と割合

	彼・彼女	指示詞＋人、先生など	合計
NS (n=20)	2 (9.5%)	17 (89.4%)	19 (100%)
NNS (n=20)	11 (73.3%)	4 (26.6%)	15 (100%)

以下にその使用例を示す。

(9) （留学中の指導教官の話で）

DA: 東大、で僕を引き受けてくれたのは、あのーその、フランス文学の先生でした。

NS: 何ていう先生でした。

DA: えーと、小林よしひこ先生ですねー(…)ルソーの専門家です。(…)で、が定年になりましたらですねー、青柳こういち先生というイギリス文学とか(…)で、彼が定年になったら今度とりびやし先生というやっとな近代日本史の専門家が指導教官になってくださったんですね。

この場合、「彼」よりも「その先生」などとする方が適当であろう。

(10) (童話「赤頭巾ちゃん」のあらすじを述べている)

EH: お母さんは、色々の物を準備して、その、女の子に、その物を渡して、
どうぞおばあちゃんの所に行って、これを渡してねと言いました。(...)狼は、
すごく、彼女を食べたかったんですね。(...)あの一それで、あの、彼女は逃
げましたけれども、彼はその用事を聞いていて、あの、直接おばあさんの所へ、
片道に、行きました。

「女の子」「狼」をそれぞれ「彼女」「彼」で受けているが、やはり「その女の子」、「その狼」とすべきであり、とくに動物を彼、とするのは不自然さが増す。

中西家(1993)は英語に較べ日本語に指示詞+名詞が多用されることを指摘し、その原因の一つとして、英語における三人称代名詞(所有詞も含める)が日本語では「連体指示詞+名詞」で表される傾向を挙げている。つまり、英語では he、she となることを、日本語では「彼」「彼女」ではなく、「この人」「その人」などで受ける。また、「彼」「彼女」は日本語では語彙としてまだ新しく十分に定着していないため、ともしている。

以上より英語からの干渉として考えられるのは、「彼」「彼女」の多用が考えられるが、上で見たように、確かに、学習者の会話で目立つ傾向だった。特に(9)のように、自分の目上にあたる人物を「先生」ではなく「彼」と指すのは、コンテキストによっては失礼な響きがある。このように指示詞が適切な場合にもそれを使わないことによって、日本語として不適切な響きがする、というこのような場合は「非用」といえるであろう。(9)の発話は超上級レベルの学習者によるものだが、それでもこのような非用を示すのである。教師の側から、早い段階から明示的にその不適切さを学習者に教える必要があるだろう。

その他見られたパターンは、一度会話に導入された名詞を代名詞で受けるのではなく、その名詞を繰り返すという NS に近いストラテジーを取れるが、指示詞が抜けるという例である。

(11) NS: 最近読んだ本は(...)

BB: 「ペリカンブリーフ」と言う小説を読んで、みました。小説は、学校の先生が、学生が論文を書いて、それ、それから(...)

- (12) (高校の授業を見学して日本語に興味を持ったという学習者に理由を聞く)

NS: どうして、何もわからなかった訳でしょ。

HH: はい、(...) あの一、先生は、とてもおもしろいと、私にはこれは新しいスタイルで、先生が教えることはとても面白い。

この場合、指示詞(この場合「その」)がないと、結束性を失ってしまい、「小説」「先生」がその直前に導入されたものを指すのか、また別ものなのかといった混乱が聞き手におきてしまう。

一方、一度導入された名詞には指示詞を必ずつければよいというものではない。以下は、総称名詞・固有名詞に不必要な指示形容詞を使用してしまった例である。

- (13) DS: (...) 合気道は、大学に入る前から、あ、始めました。

NS: あー、そうですか。テニスと合気道では何が違いますか。

DS: あ、たくさん違います。(...) テニスは結構外ですとか、(...) アメリカ的なスポーツですが、あの合気道は武道ですから、もうちょっと、難しい(...)

- (14) NS: どうして東京が一番いいんですか。

JS: (...) いろんな、遊園地とかデパートとか、公園、いろんなものできるから、この東京の中に。それが好きなんです。

総称名詞、固有名詞は、指示形容詞がなくても聞き手が指示対象を同定できるが、普通名詞はそうした性質を持たない。Tsutsui (1991) は、ディスコースに初出の先行詞と、それを受ける名詞である照応名詞句が、どれだけ同定できるかにより、指示詞の省略(不)可能性について考察している。総称・固有名詞が先行詞の場合、照応名詞句がそれを指すということを理解できる可能性が極めて高いため、指示形容詞は不要になる(合気道、東京の例)。しかし、(12)の場合、先行詞「先生」が、照応名詞句である二番目の「先生」と同定できる可能性は低い。したがって、指示形容詞を用いなければならない。用いなければ、二番目の「先生」は全く別の人を指していると解釈される可能性があるためである。しかしながら、普通名詞がいつも指示形容詞を必要とするかというとはそうではなく、省略可能な場合もある。詳しい議論は本稿の範疇を越えるので避けるが、より適切な指示形容詞の使用を目指すため、判断できる知識を学習者に与える必

要がある。

7. コ系・ソ系の混同

最後に、調査結果の節で見たコ系とソ系指示詞の混同の例をもう一つ示す。まとまりのある談話の中で、学習者が選ぶ指示詞にゆれがあることが観察された。

(15) (ある小説の登場人物の説明で)

NS: その子供は軍隊的な天才ですから、ちょっと難しいんですが、その人は、変な人が来た、えー、言葉が分からないんですが、この人は(…)アメリカ人とか、日本人とか、みなさんが、(…)軍隊の理念に習いましたが(…)

この場合、同じ登場人物を指すのに「その」「この」両方使用している。文脈上、「その」が適切であるが、最初に適切な「その」を使用したのにもかかわらず、次に同じ照応名詞を示すのに「この」を使用してしまっている。このような例は全部で6例あったが、全てコ系かソ系かの間のゆれだった。

前節でも述べたが、先行研究ではア系とソ系の選択の難しさが主に扱われていたが、今回の調査では、このようにソ系とコ系の選択も困難であるという観察がなされた。この原因は本調査の結果だけでは特定できないが、英語の干渉が考えられるだろうか。中西家(1993)は this、that とコ系ソ、系の違いを Hassan(1976)を引用して考察している。

(16) ‘this’, is more specific than ‘that’ since ‘this’ has the speaker as its point of reference while ‘that’ has no particular reference point. It is simply interpreted as ‘not this’. (中西家 1993, 50)

つまり、指示詞‘this’は、先行詞となる名詞句が明確に算定できる場合や、直接的に先行詞が固定される場合に用いられ、‘that’よりは比較的に指示性の強い語であるとしている。もし学習者がコ系がこのような用法があると解釈している場合、この母語による負の転移により、何かをはっきり示す時に使うと理解しているかも知れない。しかしながら、本調査の結果だけでは推論の域を出られないので、今後の課題としたい。

8. まとめ

本稿では、コーパス・データの会話資料を元に、英語を母語とする日本語学習者によるコ・ソ・アの指示形容詞の誤用の特徴を見てきた。以下に、第三節で提示した研究目標を検討しながら、この研究で明らかになったことをまとめる。

迫田（1993）で得られた英語話者に関する結果、つまり二項対立指示体系の母語話者はソ系が少ないといった報告であるが、日本語母語話者と同じように、やはりソ系が多く使われるという結果になった。

さらに、迫田（1997）で得られた韓国語・中国語話者の学習者の結果であるが、英語話者の会話で調査した場合、あてはまらないことが明らかになった。ソ系の絶対使用率が多く、ア系の積極的な使用はほとんど見られなかった。指示詞の非用という点からは、指示詞＋名詞の代わりに「彼、彼女」を使用し、その結果日本語として不適切になってしまう、という例を見た。

さらに、従来言われているア系・ソ系の混同だけでなく、コ系・ソ系の混同も多いということが明らかになった。

今後の課題としては、学習者の母語指示体系（英語以外も）と日本語のコ・ソ・アの違いをより深く考察し、その上で、母語の転移の問題、さらにアとソだけでなく、コとソの使い分けについても研究したい。

注

- （1）『平成 8-10 年度文部省科学研究費補助特定領域研究「人文科学とコンピュータ」公募研究（「日本語会話データベースの構築と談話分析」研究代表者 上村隆一）の成果によるコーパスデータで、ウェブ上で公開されている（<http://www.env.kitakyu-u.ac.jp/corpus/>）。著作権は北九州市立大学上村隆一教授に帰属する。

- （2）迫田（1993）の実際のデータを以下に示す（p.75）

母語指示体系別コ・ソ・アの使用数及びその平均と割合									
	二項学習者 N=30			三項学習者 N=30			日本人 N=30		
	総数	平均	率%	総数	平均	率%	総数	平均	率%
コ系	450	15.0	31	334	11.13	21	72	7.2	6
ソ系	678	22.6	47	1069	35.63	68	824	82.4	70
ア系	306	10.2	21	163	5.43	10	278	27.8	24

参考文献

- 迫田久美子 (1993) 「話し言葉におけるコ・ソ・アの中間言語研究」『日本語教育』81号 67-80
- 迫田久美子 (1997) 「日本語学習者における指示詞ソとアの使い分けに関する研究」『第二言語習得会』1号 57-70
- 迫田久美子 (2001) 「第一言語と第二言語の習得過程 - 対話調査による指示詞コ・ソ・アの習得」南雅彦・アラム佐々木幸子編『言語額と日本語教育 II』くろしお出版
- 銅直信子 (1998) 「談話参加者の情報量と指示詞」『日本語教育』96号 97-108
- 中西家栄子 (1993) 「日本語・英語における連体指示詞の対照研究について」『獨協大学教養諸学研究』第27巻 41-54
- 牧野成一、筒井通雄 (1986) 「日本語基本文法辞典」Japan Times
- 水谷信子 (1993) 「『非用』と談話の展開」『日本語学』第12巻 88-96 明治書院
- Gundel, J., Hedberg, N., & Zacharski, R. (1993). Cognitive status and the form of referring expressions in discourse. *Language*, 69(2), 274-307.
- McGloin, N. (1989). *A Students' Guide to Japanese Grammar*. Tokyo: Taishukan.
- Niimura, T., & Hayashi, B. (1994). English and Japanese demonstratives: A contrastive study of second language acquisition. *Issues in Applied Linguistics*, 5(2), 327-351.
- Tsutsui, M. (1991). A study of demonstrative adjectives before anaphoric nouns in Japanese. In O. Kamada & W. M. Jacobsen (Eds.), *On Japanese and how to teach it*. Tokyo: Japan Times.

謝辞

小論作成に当たり、コーパスデータ使用を快諾くださった北九州市立大学上村隆一先生に厚く御礼申し上げます。

(motohash@kansaigaidai.ac.jp)